

冷氣の中で

太く薄い3本の弓なりの雲が、果てしなく
地球の丸さをなぞるために続いている
その背景となっている青は
ひたすら遠く、微塵も質量を有しない

かつてないほど広大に張り巡らされたシナプス
地上を支配する無数の指令の分厚い網

乾いた血糊のような色をした木の葉は
いまだ散らず、震え、わななき、風に耐えている
凍えるような季節は、まだ始まったばかりだ

ひとつの感嘆符も必要ない——
そういうものとしての現在

薄れてゆく自己保存の本能
消えてゆく生と死の境界

不安は既に無意識の中に、日常として溶け込み
忘却され、改めて認識されることは有り得ない

手の甲に現れ始めた皮膚の弛み
それをゆっくりとなぞる3本の指先

音もなくすすり泣く呼吸
目を閉じても見えてしまう日常の風景

窓ガラスに透明な線を引く冬の陽光

未完であるという認識が我々を滅ぼし
生を、取るに足らぬ苦行とする

認識、というまやかし

破壊の限りを尽くしたい——
それしかない

そこにハンマーがある

(2011.12.15)